

子どもの心の発達と教育的支援・臨床的対応

—— 乳児期、幼児期、学童期の子どもへの基本姿勢と言葉かけをめぐって ——

三輪 壽 二*

(2023年8月9日受理)

A Study on the Educational Guidance and Clinical Treatment on Erikson's Developmental Theory

SYUJI Miwa*

キーワード: 乳児期, 幼児期, 学童期, Erikson 発達理論, 言葉かけ, 教育的支援, 臨床的態度

E.H.Eriksonのライフサイクル理論は有名である。人生が8つの段階に分けられて各段階には果たすべきテーマがあるとされる。本研究はそれらのうち、乳児期、幼児期初期、遊戯期、学童期の4つの発達段階に焦点を当て、各時期における特徴を分析し、そこから各段階における本質的特徴を把握して、その特徴に応じた具体的な言葉を考察することを目的としている。各発達段階の本質的な特徴を理解すれば、どんな方向に向かった言葉を子どもにかけることがその段階にいる子どもたちの成長につながるのかわかるはずである。また、同時に、ある段階で傷ついた子どもたちが後の段階で立ち直るためには、既に進んでしまっているいまの段階の言葉よりも、傷ついた段階における成長を促してくれる言葉の方が必要になることも考えられるだろう。

教師は、子どもたちと今現在向き合うが、子どもたちには過去も未来もある。本研究は、成長促進的な意味から傷つき体験の回復まで、広い意味での教育的支援を子どもたちに行うために、どのような言葉かけをするか、という視点から考察していく。

本研究の目的

本研究の目的は、E. H. Erikson の発達理論にそって、子どもの発達に対応した言葉かけ（あるいは、発達を促進するような言葉かけ）、さらに教育的かつ臨床的な姿勢・態度を考究することである。

Erikson に関する研究は膨大で、すでにやりつくされているとも言えるが、幼児期と青年期の理論的研究がそのほとんどを占めている。また、幼児教育に関する書籍やネットの情報には、彼の理論をもとにした子どもの捉え方を説明するものも多い。しかし、例えば、「優しく接する」というと

*茨城大学教育学部

きの「優しく」は、どういう本質を根に持って語られるのか、そしてそれを表現する具体的な言葉や行動が何であるのかはよくわからないことが多い。それぞれの発達段階において、教育支援的・臨床的な言葉かけとしてどのようなものが適しているのか、そしてその支援や対応の背景にある姿勢や態度をどう考えるか、それらの具体的な課題に応える研究は少ない。

本研究は、Erikson の理論的研究を実践的課題として見直し、乳児期から児童期までの子どもたちの心理的発達に即した適切で本質的な言葉を理論的かつ経験的に探究することを目的とする。それはある段階や時期の子どもたちの発達を促進させる言葉であり、どこかの時期や段階で傷ついた子どもの回復を支える言葉にもなると考えられる。

時代が変われば、世の中が求める人間像も変化する。Erikson が活躍した 1950～1970 年代の時代状況は現代とは異なる。したがって、生理的な、あるいは身体的な成長・発達過程はともかく、心の発達のテーマは Erikson と同じ視線で捉えてよいかどうかは疑問が残る。しかし、上述のように Erikson の議論は現在の幼児教育にも影響を与えていることは間違いないし、小学校の教員に学校に入学する前に子どもたちに身につけておいてもらいたい特性を尋ねると、Erikson の指摘と大きく変わるところがないこともよく経験する。

そこで、本研究では、ライフステージ理論として提起された Erikson の発達段階論を実践的課題として見直し、各段階の特徴から導かれる教育的な指導及び臨床的姿勢や態度を考察する。教育的な指導の中でも、特に言葉かけに注目し、どのような言葉かけやそれに伴う臨床的な姿勢・態度が必要なのかを論究することが目的となる。

第1章 E.H.Erikson の発達理論における子どもの心の発達

第一節 心の発達に関する基本的な考え方

人間の発達についてはいくつかの原則があるとされてきたが、本研究との関係でとりわけ重要と考えられるものを三つ取り上げる。

一つめは、「心の発達には段階があり、各段階に応じたテーマがある」という考え方である。これは、身体成長であれば確かめやすいが、不可視の心には仮説的なものとならざるを得ない側面を持つ。身体成長に対するこの考え方が心の発達にも同様に適用されて研究されてきた。たとえば、多くの人は、知的発達の段階性を暗黙の前提として、「まだ、〇歳の子どもにそんなことを言ってもわからない」と語り、私たちの日常的な感覚や経験もそれに同意する。そして、段階性を前提とすればその段階では××という発達課題を達成しなければならない、という具合に、発達段階に対応する課題やテーマ設定が必要になる。

二つめは、「心の発達には順序がある」ということである。心の発達に段階や段階に応じたテーマがあるとすれば、それらの段階には当然順序が予想される。順序と段階性はコインの表裏のような関係である。発達には一定の順序があり、それをいくつかまとめると段階と捉えることができる。さらに、各段階を任意に子どもが選び発達、成長していくとは考えづらい。身体の成長に、「寝たままごろごろする→座る→ハイハイ→歩く」という順序があるように、心の発達にも段階内部および段階間に順序がある、と考えるのが妥当であろう。つまり、心の発達には時間軸があるということである。

心の構造や機能に着目する考え方からすれば、必ずしも心の発達に時間軸を持ち込む必要はない。しかし、幼児期に身に付けた構造(システム)が成人になっても影響し続けることは私たちの経験でも明らかであり、実際に時間が経つ(年を取る)と変容しづらくなる経験は、発達という現象において時間軸を無視することは難しいことを意味する。構造や機能であれば、条件設定をし直せば、するかしないかは別にしても変更自体は容易なはずである。

三つ目は、人間の心の発達は他の動物と比較すると柔軟性があるということである。動物の発達には臨界期がある。臨界期とはある特定の時期を外すと学習が困難になることである。上述したことと少し矛盾するようであるが、柔軟性とは、人間の場合、ある発達段階におけるテーマ達成を後の段階でも達成することが一定程度可能であるということである。ゆえに、精神療法や心理療法は意味がある営みとして存在するのである。

つまり、心の発達に段階性があるとすれば、これら 3 つの点はほぼ必然的に想定しうる人間の心の発達の論理となるし、本研究でもこれらの点は前提とする原理である。

第二節 Erikson 理論における心の発達と心理—社会的発達課題

Erikson が人生を8つのステージに分け、各ステージに特有の心理—社会的発達テーマがあると考えたことは有名である。Erikson は、課題という捉え方では、前段階を達成できないと次の段階に進めないというニュアンスが強くなると考え、あえてテーマという概念で心理—社会的な発達テーマを構想している。こうした捉え方は心の発達の柔軟性の一側面であり、Erikson が心の発達の柔軟性を前提としていたことがわかるだろう。

それぞれの心理—社会的発達テーマは葛藤的(対立的)図式で表現され、Erikson はその望ましい方が望ましくない方よりも少し多く獲得されればよいと考えた。つまり、ポジティブな要素が多少強い必要はあるが、人間にはこの両方が必ず備わるのであり、一方は他方を完全に排除できるものではなく、両方を抱えながら生きることの重要性を Erikson は指摘していることになる。この葛藤的(対立的)図式で発達テーマが表現されていることが Erikson の発達論の特徴の一つである。

これらの葛藤的(対立的)図式は臨界期的側面を有すると同時に、人生全般にわたって繰り返し現れ、その都度に遂行されていくものとして捉えられている。先ほどの人間の発達の柔軟性という議論がここでも重なっている。Erikson の発達図式の二つ目の特徴は漸成原理と呼ばれ、発達のあり方を人生全体にわたって継続的かつ段階的に捉えている点である。つまり、前の段階のテーマは次の段階のそれと無関係ではなく、前の段階が次の段階の準備状態となりながら自我の発達が促進されていく、ということである。

Erikson の心理—社会的発達段階をまとめたものが下の表1である。本研究は学童期までの発達を扱うが、第5段階の青年期までを示し、第6段階以降を除外してある。したがって、表1は Erikson の議論を忠実に反映したものではない。教育的な言葉かけや臨床的姿勢あるいは態度を考察する本研究の目的に応じて項目の変更等を行っているので、表1について説明をしておく。「心理—社会的発達テーマ」は Erikson 夫妻の『ライフサイクル、その終結』(村瀬・近藤訳,2001)を使っており、諸々の研究でも紹介されている。次の「関係性」には、各段階で子どもが置かれている、自己と他者の状況の基本的特徴あるいは各段階における葛藤的発達テーマのうち望ましいテーマの本質的特徴が記述されている。「関連する性質」は、Erikson が指摘した各段階の「徳」を一部含みながら、その段階で形成されやすいパーソナリティ特性を記してある。「徳」はこの葛藤的テーマを自我が乗り越えたときに獲得される特性と考えてよい。乳

児期では希望、幼児期初期では意志、遊戯期では目的、学童期では適格、青年期では誠実さである。また、年齢については目安である。

表1 Erikson の第5段階までのライフサイクル論

発達時期	心理-社会的発達テーマ	関係性	関連する性質	年齢
青年期	同一性 対 同一性混乱	自分が何者であるかに対する解答 (他者と異なる自己の形成)	誠実さ	12～30 歳
学童期	勤勉性 対 劣等感	家庭外の仲間との協力による課題 達成	努力、協力心	6～12 歳
遊戯期	自主性 対 罪悪感	環境への自由な働きかけ、子ども同 士の関係形成	罪悪感、積極性	4～6 歳
幼児期 初期	自律性 対 恥・疑惑	条件つきで認められる	完全主義、几帳面、 がまん	2～4 歳
乳児期	基本的信頼 対 基本的 不信	無条件で保護される状態	安心感、楽天性、被 害感	0～2 歳

Erikson がこれら5つの段階以降に、初期成人期、成人期、老年期を研究して全部で8つのステージによる発達理論をまとめたことは既述の通りである。また、Erikson は心理-社会的発達のテーマ以外では、「中心となる環境」、「徳」という項目を立てて発達の様相を把握した。「中心となる環境」は、各ステージでの発達を左右する中核環境のこと、「徳」は、先述の通りである。Erikson の研究は青年期のアイデンティティ論が有名であるが、人間の一生にとって特に重要なステージとして考えていたのは乳児期と青年期であり、次いで親になる時期である成人期を重視していたようである。

第三節 望ましい発達テーマが十分に達成できないことによる臨床的課題

上述したように Erikson は葛藤的な2つの発達テーマは両方とも必ず人の心に同居すると考えたが、望ましくないテーマ(右側のテーマで、たとえば乳児期では不信感)が大きく育った場合、どのような問題が生じるのだろうか。望ましいテーマが十分に育たない場合、大きく分けて3つのことが考えられる。一つはその当該の時期にすぐに臨床的課題が表現されることである。たとえば、マターナル・デプリベーションはその例であるし、夜尿症や遺尿症、チックなどもその可能性がある。二つは後の時期にその影響が表れる場合で、この場合、性格形成、あるいは後の時期の臨床的課題の発生につながるような場合である。望ましいテーマを身に付ける場合は望ましくないテーマを身に付けた場合よりも性格形成に強く影響すると考えられているが、当然、望ましいテーマであるため基本的に適応は悪くなく、後の時期における修復もしやすい。難しいのは、望ましいテーマだからと言ってそれだけでは人格発達はうまくないという点である。バランスが問われてくるのである。三つは、後の時期の発達テーマの達成レベルへの影響が懸念されることである。

したがって、乳児期の基本的信頼感が低くとどまったために、幼児期初期の望ましい発達テーマが十

分に達成できず、臨床的課題というほどではなくても、小学校入学後にかなりの引込み思案で被害感が強い児童となるといったことである。そうなれば、教師にとって“気になる子ども”になるだろう。教師が気になった場合に、どのようにその子どもと対応していくかが、子どもの成長に影響することは確かであろう。

性格にしても臨床的課題にしても、以前の発達段階の課題と向き合うという事態になるので、その対応に関わる姿勢や態度はいったん当該の発達時期(段階)に戻すことが必要になる。ある児童の特徴的な行動特性がどの発達段階の課題であるかを認識し、その課題を残した段階に求められている状況構成、臨床的な姿勢や態度を背景にした教育的な言葉かけが必要となる。教師にとって子どもの気になる課題は、子どもの現在の発達段階以前の段階の課題であることが多い。発達段階の知識と射程は対応の本質を知ることにつながっている。表1「関係性」と「関連する性質」の記載があるのはそれを明確にするためである。

第二章 乳児期と教育的な言葉かけ、及び臨床的な姿勢・態度の検討

乳児期の場合、まだ言語の発達が不十分であるため、教育的な言葉かけというよりも臨床的な姿勢や態度が重要となる。乳児期の基本的信頼感対不信感というテーマは、「外界への信頼感」のことである。つまり、自分の周囲の世界を信じていることができる、自分だけで処理できない課題があれば周囲からの援助を期待できるといった、人生に対する基本的な態度の形成と関わっている。つまり、何かあっても何とかなる、世界はそれほど悪くないと思うことができるという、生きる基本姿勢のようなことであり、良い意味での楽観的な展望を持てるということである。それゆえ、Eriksonはこの時期を重視したと言えよう。

このテーマは、この時期が総体的には子どもが無力であり、無条件に愛情を注がれる状態にあることから生じる。明確な言葉(いわゆる言語)による要求が制限されている乳児の場合、主たる養育者が子どもの要求を察知して対応することが求められる。つまり、この時期は子どもの欲求を他者が共感的に予測して満足させることが必要となる。いわば、依存性をしっかり満たすことが対応の基本となる。そのため、主たる養育者が乳児の欲求に十分に対処できない場合、周囲世界への不信感、何かを周囲に期待しても与えてもらえないだろうという予想、つまり、悲観的に世界を解釈する特性が身に付きやすく、さらにその不信感が大きくなれば、世界に対する被害感、あるいは「根本的な懐疑」(Erikson.E.H,1951)に発展する可能性がある。

問題は、この時期に十分な対応を受けられなかった子どもが後に表現する課題に、どのように幼稚園や小学校等の教師が対応していくか、である。幼児期や児童期になっていけば、言葉による対応が可能になっているため、教師の対応は言葉による教育的指導が可能であるが、乳児はそれによる効果を期待できない。したがって、対応は広義の行動的側面、接触、雰囲気といったものが重要なものとなる。

乳児期における基本的な周囲状況は無条件で保護される状態である。すなわち、子どもの欲求に共感的かつ比較的正確に反応して子どもの満足を満たすことが行動的に求められるとともに、優しく暖かい接触や落ち着いた雰囲気によって、子どもに居心地の良さや安心感を得る経験を与えることが重要である。安心感や居場所感といった強い情緒的な結合を感じ取れる関係や状況は望ましい二者関係の性質とも言える。

それゆえ、乳児期の課題が大きい子どもに後の段階で対応する際には、例えば、声をかける場合でも、

すぐ近くで当該の子どもだけにそっと話しかける行動であったり、「これは先生と二人だけの秘密だね」といった対応が考えられるだろう。そして、基本的な言葉かけの選択も、「安心していいよ」「大丈夫だよ」「そのままでもいいよ」といった居場所感が醸成されるような言葉が望ましいと考えられる。また、不快、不愉快、危機的な事態に対しては「全部、なかったことにしよう」「これ以上はやめちゃおう」といった、事態そのものを無視する、あるいは逃避的な言葉かけをしていくことが考えられるだろう。

第三章 幼児期の心の発達と教育的な言葉かけ、及び臨床的な姿勢・態度の検討

『幼稚園教育要領』(文部科学省,平成 29 年)では、幼稚園教育および小学校以上の学校教育で伸ばしていく力として「資質・能力」が挙げられており、それは、幼児教育においては、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱から成り立っている。その具体像として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が 10 の姿として示されている。すなわち、「健康なこころと体」、「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活とのかかわり」、「思考力の芽生え」、「自然との関わり・生命尊重」、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」、「言葉による伝えあい」、「豊かな感性」である。

Erikson の発達理論に関係づければ、10 の姿のうち、「健康なこころと体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活とのかかわり」が特に関係が深い。しかし、Erikson の理論では、「自立心」や「協同性」は学童期のテーマと関係がより深く、幼児期の望ましい発達テーマは「自律性」「自発性」「主導性」として理論化されている。これらは特に矛盾しているわけではない。10の姿の「自立心」もEriksonのそれも目標行動といった点で同じ言葉が使われているが、Erikson の場合何かを意識的に目指すというよりも、ある事柄に対する自分の関心を満足させることが結果的に目的である、というニュアンスである。幼児期が生活自立や反抗期を含めた心と生活の自立性に向かうのに対して、Erikson は自分から進んで行動するといった心の側の自立性を好奇心と絡めて論じており、部分的には反抗期と重なり、部分的には生活自立への興味関心とも重なると言えるだろう。その意味で、自発性は「自立心」とも重なる。しかし、Erikson の「主導性」は『幼稚園教育要領』には打ち出されていない。また、『幼稚園教育要領』の「協同性」についてはいささかの疑義が残る。これらについては、遊戯期の節で述べる。また、本研究では、幼児期を幼児期初期と遊戯期の2つに分けて考察する。

第一節 幼児期初期の検討

幼児期初期は 2~4(1~3、4)歳が目安とされているが、幼稚園の年少の幼児あたりがイメージできるだろう。この時期のテーマは、自律性対恥、疑惑である。この自律性は、原理的には自分の思い通りにしたいということであるが、自分の内的欲求に対するコントロールを意味している。それは第一次反抗期の自己主張の強さとも関係している。

乳児期の対象が外界への信頼であるとするれば、この時期の特徴は内的世界への信頼、つまり自分に対する信頼感と言えるだろう。外界が困った時にでも頼りになる世界である、ということよりも自分は自分の欲求や与えられた課題をこなせるという自己確信の在り方がテーマとなっている。このテーマを表現する出来事にトイレトレーニングがある。トイレトレーニングは排泄欲求を即時的に満たすのではなく、決められた場所までその欲求を制御することが求められる。つまり、がまんが必要となる。乳児期では欲

求満足は即時的に果たされたが、この時期になると、欲求の制御が生活のあちこちで求められることになる。他方、知的能力や身体能力が高くなるために第一次反抗期が訪れ、子どもは自分の内的欲求を満足させることに執着する動きが強まる。つまり、環境との関係が乳児期よりも一層濃密かつ複雑な様相を呈し、外的世界への適応が求められてくる時期に入り、欲求満足が遅延あるいは断念が強いられる時期であると言えるだろう。精神分析理論で言う現実原則に従うことがこの時期において求められるのである。

子どもは自分の内的欲求をどれだけコントロールできるようになるかが問われている。親を代表とする主たる養育者が子どもを褒めたり、賞賛を与えたりするのに条件がつく。自分の欲求を我慢して適切な対応ができると賞賛をもらえる。まだ、親からの愛情が自らの生存に欠かせない時期であるから、この外界からの要求に応えるよう子どもは自分を制御する方向に向かう。それゆえ、この制御に失敗が繰り返されると、親からの叱責をうける可能性があり、子どもは危機状態に陥る。欲求制御の失敗は、子どもが自分をコントロールすることができない感覚を助長させて、自分自身への不信感、頼りなさ、迷いを生むため、自分への疑惑、失敗して恥ずかしいという特性をつくりだす可能性が高い。他方、知的能力や身体的能力等の発達によって自我あるいは自分の欲求に執着する動きが起こり、第一次反抗期を迎える。これはある意味では自分の中から発生する欲求を突き詰めたいという欲求でもあり、自発性の萌芽とも言えるのだが、欲求の満足に固執する。つまり、自分の内的欲求の満足に固執する傾向と、欲求を制御して外界に適応せねばならない要請に応える傾向の両方がかなりの強度で子どもを襲う矛盾状態に陥るのである。自らの欲求満足を追求・優先すれば罰を受け、自分の欲求を放棄すれば報酬が与えられる、という欲求と報酬の矛盾構造である。欲求の一時的延期によって報酬を得る、という条件付きの報酬で妥協を求められるのがこの時期の子どもの環境である。

この時期の性格形成は複雑なものとなる。成功体験が穏やかな環境条件で累積すれば問題はないが、成功体験が多くてもそれが親からの愛情を失うことへの過度の怖れから生じれば完全主義的な、あるいは全く融通が効かない性格が形成されることが多い。また、この時期における有名な精神分析的性格形成論として S.Frued の肛門期性格(1908)がある。形成過程は詳述しないが、几帳面、儉約、わがままという性格形成が指摘されている。成功体験が多くなるにせよ、失敗体験が多くなるにせよ、この時期の状況的特徴は子どもに対する周囲世界の評価的対応が新たに登場するとともに、それが一気に増加することである。先述したように、量的にも質的にも子どもは環境との関係を気にしなくてはならなくなる。つまり、現実に対する適応の課題が打ち出されるのである。

関わりの本質の方針を考えるときに参考になるのがトイレトレーニングにおける親の態度である。トイレトレーニングにおける親の基本的態度は、「できたらほめる、失敗は知らぬ顔をする」である。失敗を叱責しないことにとどまらず、それについては言及せず、失敗がなかったかのように見て見ぬふりをするということである。しかし、3歳あたりになると長期的な記憶はともかく、その時点における記憶や状況認知は可能になる。つまり、子どもは、自分が失敗した自覚をその時点では持つ。したがって対応の基本は、失敗したことを前提としてそれに触れずそれを叱らず、現状における安心感を与えて、将来の失敗を意識させないということになる。すなわち、「慰める」ことに近いのではないか。とすれば、失敗を慰めるための言葉としては、「残念だったね」「口惜しいね」「気にしない、気にしない」という感じの声かけになると考えられる。さらに、少し深刻な場合ならば、乳児期的な要素である「安心感」の度合いを強くする、あるいは加えるのもよいかもしれない。たとえば、「残念だったけれど大丈夫だよ」といった具合である。臨床的態度や姿勢との関係では、抱え込みすぎず、放りっぱなしにすることもなく、また様々な枠に縛り付け過ぎず、その中間地帯である「大目に見る」とか「しばらく好きにさせておく」とか「これだけはだめだけど、あ

とは好きなようにして」といった、大らかな態度が求められるのではないか。

また、子どもは周囲に求められる要請を自分自身の要求として位置付けなおす必要が生じる。「トイレで排泄を行うのは他者からの要求ではなく、自分の欲求なのだ」、と。元来は他者の要請であったものを自分の意志に転嫁し、組み込む。そのため、この時期を乗り越えると徳として「意志」が身に付く。

第二節 遊戯期における教育的な言葉かけ、及び臨床的な姿勢・態度の検討

遊戯期は年齢的には 4～6 歳が目安である。幼児期初期を含めて幼稚園の時期と重なるので、『幼稚園教育要領』における 10 のテーマが発達課題を考えると参考になるが、これについては先述した通りである。

この時期の Erikson 理論における発達テーマは、自主性対罪悪感である。自主性について Erikson は「目標達成への執念、征服の喜び」と述べている。この自主性には、2つのテーマが内在している。一つは、幼児が好奇心を持って外界に自由に働きかける姿がイメージできる。移動能力も知的能力も高まる中で、自分の関心を引いた人、物、出来事等の環境に働きかけ、時には関心のある出来事や物を探求し、時にはその探求や関心のために他者を自分の思い通りに動かそうとする。その動きの原初は自分の関心や欲求から発生しているという意味で自発性を内蔵している。もう一つは、この頃、同年齢の他者と出会う機会が準備されるという環境条件に沿って他者との関係形成が求められるが、自分の欲求を果たすことを人の中で追及すればそこには主導性、あるいはリーダーシップの萌芽が位置づく。こうして、自主性は自発性(主に物や出来事を対象)と主導性(主に人を対象)を意味する。

ここで先述した Erikson の主導性と絡めて、『幼稚園教育要領』の協同性について論述しておく。この時期は上述の主導性の考え方からもわかるように、同じ一つの事柄を意識して協力しながら作業するという真の意味での協同作業ではなく、あくまで役割分担的な作業であり、実態としては共同作業に近いと考えられる。つまり、子どもたちの行う個々の作業は子どもたちの好みのパートを行っており、行動的には協同作業をしているように見えても、意識的には自分がやりたい役割を担うという状態に近い。その状況においては、自分がやりたい作業を行うための自己主張性が主導性の中身となる。それは、好みの役割を得るための主張であるが、その主張のありかたによっては結果的にリーダーシップにも発展する。自発的な自分の欲求を満たすための方法がリーダーシップに結実する。

このように考えてみると、『幼稚園教育要領』で言われている協同性をこの時期に位置づけてよいのか、という疑問が生まれる。「幼児期の終わりまでに育ててほしい 10 の姿」は達成目標ではないが、むしろ人間関係が始まった当初から協同性が方針として立てられるのはいささか早い。むしろ、Erikson の主導性くらいの方が自然であるとも考えられよう。たとえ、幼児期初期で他者の要請を自分の欲求に組み直すことで意志を獲得していくことが達成されていてもその背景は親からの愛情という報酬に裏打ちされたものであり、他者との平等な関係を前提に達成されるものではない。

他方、自発性や主導性の行き過ぎは、様々な破壊を引き起こしたり、他者を侵害したりする。たとえば、時計がなぜ動くのか、と好奇心を持った子どもが、修理できないのに時計を分解してしまうようなことである。あるいは、学芸会で自分が演じたい役を得るために主導性を発揮して他の子どもたちの役柄を割り振ってしまうような場合である。逆に、子どもの好奇心に満ちた探検を破壊的だから、危険だから、と次々に制限していくことも結果として、自主性の阻害要因となることはわかりやすい。いずれにせよ、ここに阻害性が高くなれば、自分から進んで何かを行う自主性の動きは停滞し、さらに目的を追求していく意欲の低下を招く、と考えられるのである。そして、破壊も他者への侵害も行き過ぎれば周囲からの叱責を受ける

かもしれない。自発的な行動以前に、周囲から制止がかかってしまう環境は、子どもに自分がやりたいことは大人にとっては悪、さらには自分から何かを欲すること自体がよろしくないと感じさせることになる。罪悪感の発生である。つまり、他者からの制限が内在化され自分の内側に自分の行動を制御する装置が出来上がってくるのもこの時期である、と精神分析理論では考えられている。罪悪感が必要な装置であるが、これが強く機能しすぎれば、いたずらに自己を責め、いわゆる神経症の温床になることはすでによく知られている。

もちろん、この時期に制限が加わることは悪いことばかりではない。自発性に制限がかかり行動が束縛されると、子どもは空想の中で自分の目的を追求することになる。この制限が高じて空想の中に逃避することが基本となれば不適応課題に発展することもあるが、他方、空想は様々な創造の母体ともなる。想像はいまここにはないものを作り出す創造の源流でもある。しかも、空想は責任を伴わずに自在に欲求を膨らませて関心事を追求できる。これに近い現実はまさに遊びであり、遊戯期という名称は意味深い。遊びは空想と現実の間に存在している。子どもたちはこの時期、遊びという場をとおして、友人と関係を持ち、関係を育む。遊びを通して、自分たちが考案した新しいルールを設定して、それを守りながらともに楽しむ。それゆえ、この時期の子どもにとって遊びが重要な活動となるのである。遊びの中には自分の好奇心を誘うもの、楽しく行うための規範、多くの遊びには完成形や勝負といった目的が内在していることが多いのである。

この時期の性格形成は、主導性が強く働くと、たとえば場を仕切ることが多くなったり、ボスの存在になったり、自己顕示性が強くなったりする。また、熱心なのだが目的のためには手段を選ばないような考えになったりする。他方、自発性の展開が阻まれる経験が多いと、他者から要請されないと動かない、言われたことしかしない、臨床的な課題の温床に近いものとしては、何か結果が悪ければ全部自分のせい、自分が悪いのだといった考え方が生じる。罪悪感が強く作動しすぎるためである。

遊戯期における臨床的な姿勢や態度は、上の論述からもわかるように、失敗を許すことである。大人が子どもを失敗させないように作った道から外れないように監視することではなく、自発性を育てるために本人の好奇心に満ちた行動をすることを認め、失敗することに許容的であることが必要である。幼児期初期のような失敗のほうに軸を置いて「慰め」というよりも、「認める」と「許す」という感じではないか、と考えられるだろう。「大丈夫、怖がらずにやっごらん」「挑戦したんだからいいじゃない」「積極的に行動することはよいことだよ」と失敗を許しながら、自発性をきちんと褒めて評価する姿勢が必要であろう。そして、それらの言葉から醸し出される雰囲気は臨床的な態度にもつながるであろう。

第四章 学童期における教育的な言葉かけ、及び臨床的な姿勢・態度の検討

学童期(児童期)は小学校に当たる時期である。このステージのテーマは勤勉性対劣等感である。Erikson は勤勉性の意味を次のように述べている。「勤勉性とは道具の世界の法則に適応し、計画され予定された手続きの中での協同のルールにも適応した適格な活動ができる」という感覚である。つまり、「みんな協力して、計画的にかつ周囲のルールを守りながら、目標を達成する」という感覚であるが、それは同時にみんなに対して役立つという有用感を子どもに生み出すであろう。学童期には職業生活に適する考え方や技術の基礎を身に付けて将来の自分に備えるための訓練期間という側面がある。そうした技術を学ぶことが自分の得意や好みと一致していればより容易であり、学ぶことを愛することができる。

たとえ職業に結びつかなくても、たとえば、走ることが得意な子は体育祭で活躍し、歌が上手い子は音楽祭でクラスに貢献する、ということも学童期の勤勉性に内包されていると考えてよいだろう。この勤勉性は、知的能力の獲得に即して事実性をしっかり確認・認識する方法に精通し、活動遂行のために人を動かす方法を共有することによって適格性を子どもに付与していく。つまり、周囲世界で認められる認識と方法を身に付けていくことが求められていることになる。

逆に、成果が上がらなければ劣等感を持ち、自信を失う。この時期の劣等感はあまり質がよくなく、周囲の期待や要請の在り方によって、意味のない激しい競争に子どもを駆り立てたり、幼児期への退行現象を生み出したりすることがある。退行で多い現象は葛藤に関わる人物をめぐる空想にふけることである。学童期は、遊戯期の空想と現実のはざまから、より現実認識を強化できるように知的発達が進み、友人関係においても主導的なものから同じ地平から出発できる協同性への移行が可能になる時期である。また、第二次性徴までの数年間は性的欲求からも猶予されており、自我が多くを学びうる心理的には穏やかな時期でもある。

この時期の言葉かけはわりに明確であろう。努力を惜しまず目標を達成しようとする過程を大事にすることであるから、当然、成功したことは褒める等、きちんと評価をしてやるのが基本である。失敗に対して否定的であってはならない。遊戯期における自主性が一定程度身に付いていると仮定すれば、自分の内面からの動機で物事に挑戦する姿勢はできているのだから、この後は失敗しても諦めない姿勢が達成への近道である。したがって、教育的な言葉は、本来的に「励ます」ものとなる。失敗すれば、「次、頑張ろう」「一歩、一歩でよい」「うまくいかないときもあるが、次もある」「チャンスはまだまだ一杯あるよ」等々、失敗はあるが前向きに努力し挑戦し続けようというメッセージが必要である。しかし、失敗が続き不快劣等感に悩む場合は「励まし」はかえって子どもにとって厳しい制裁となる可能性がある。その時はむしろ前段階に戻っての言葉を選択することが必要となるであろう。

いずれにせよ、自我が穏やかに安定する時期であるため、学童期の臨床的課題の背景は環境的な要素の影響が強くなる。学校という場面にうまくなじめなかったり、家族の大きな問題が新しく出現したりする、といった可能性がある。特に、競争的な勢いは、社会全体の基調なので家族も学校も共通して子どもたちに対して侵襲的である。競争が強く働けば、どうしても発達テーマの中の達成的側面のみが肥大し、テーマにおける他の側面は醸成されないか、あるいは争いのための道具になる可能性がある。

第五章 総合考察及び今後の課題

本研究では、Erikson の発達理論をベースに子どもの発達の諸相や意味を分析しながら、そこから考えられる教育者あるいは臨床家の言葉かけのありようを検討した。Erikson の発達理論を、子どもの置かれた環境条件、基本状況等から捉え直すみた結果、乳児期には「安心」、幼児期初期には「慰め」、遊戯期には「認める」と「許す」、学童期には「励まし」が教師の子どもに対する中心的な態度になることを提起した。個々の具体的な言葉も例をいくつか挙げたのだが、それらは一例に過ぎない。さらに具体的で、中心的な態度とじっくりくるような言葉群を考えていく必要がある。ただ、乳児期から学童期にかけての教育的支援や臨床的態度のキーワードはまだまだ十分に練り切れていない。さらなる理論的な追及と臨床的実践や観察から捉え直さねばならない。

また、学童期の追究は不十分である。Erikson の発達理論は精神分析理論に依るところも大きいので、

性愛的欲求が弱くなる学童期にはあまり研究の蓄積を持たない傾向が強い。そのため、Erikson の論述もある意味では、学校という初めての社会組織に組み込まれた子どもたちの様相を十分に捉え切れていない感がある。Erikson の発達理論に沿った本研究も十分に論を展開し切れていない。

最後に、今回の研究では思春期を入口とする青年期の問題には触れなかった。特に、中学生を中心とする思春期の様相は、身体的、心理的、社会的に変化が大きく、その荒波の中で子どもがアイデンティティの確立に向けて歩みだす時期である。その状況は複雑であり、考えるべき課題も多様である。思春期については、さらに研究を積み重ねて、その時期にそった言葉の選択と臨床的対応の姿勢を検討したいと考えている。

引用文献

- E.H.Erikson,J.M.Erikson 著 村瀬孝雄・近藤邦夫訳 『ライフサイクル、その完結<増補版>』 みすず書房 2001
- 石本伸子 「肛門愛性格」 小川捷之編 『臨床心理用語辞典(用語・人名編)』 p106 至文堂 1981
- 岩崎徹也、他編集 『精神分析セミナーV』 岩崎学術出版 1985
- 三輪壽二「子どもたちの発達と特別な支援を必要とする子」 茨城大学教育学教室編 『教育の最新事情と研究の最前線』 福村出版 2018
- 文部科学省 『幼稚園教育要領』 平成 29 年3月(2017)
- 小此木啓吾 『精神分析の成立ちと発展』 弘文堂 1985
- レストン・ヘイブンス著 下山晴彦訳 『心理療法における言葉の使い方』 誠信書房 2001
- S.Frued 著 高橋義孝、他訳 「性格と肛門愛」 『フロイト著作集5』 p123-138 人文書院 1969